

葉山嘉樹
小林多喜二

徳永

直集

37

日本文学全集



葉山嘉樹
小林多喜二集
徳永直

日本文学全集 37



筑摩書房

日本文学全集 37

葉山嘉樹 徳永直集
小林多喜二

昭和四十五年十一月一日発行

著者

葉山嘉樹 徳永直
小林多喜二

発行者 竹之内静雄

発行所

株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社

本文印刷 三松堂印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

葉山嘉樹集 目次

海に生くる人々

五

淫売婦

一七

セメント樽の中の手紙

一八

小林多喜二集 目次

一九二八年三月十五日

一五

蟹工船

二三

党生活者

二七

徳永直集 目次

太陽のない街

三三

年譜

人と文学

四六五

小田切秀雄 四六六

口絵写真撮影（徳永直） 田沼武能

葉山嘉樹集

一九三四年
四月。

第二版。

性。原。

午後、トモ麗に暖にす。侯城の冬はもと之より、あつたは
すね遊親したものをしす。

す
は
親
し
た
の
に
あ
ず。

藝徒

靈符贈三、中并乙是

政道北天書一酒句御也乾之陰而衣(南)金林也。

ハカキ田牧切草ニ林畧作也年々じと花の如く連発をす
るが次第也。こゝから次第もいささかと来るの降る降る
と日は浅ましい限るであらう。

予が来るを、こゝから手紙でもさうに、来るのを待つ

この日は浅くしい泥うであつた。

何か書かないと思つたが、どうやら致しあつた。乞ふを致し謝とあり、何一つぼんやりとあり。その代り、こんな事はよさうな人であつた。よき父とある。のんびりして此處を去るはさうな東傳しなさい。あゝか僕もあつてさうさうだ。

海に生くる人々

室蘭港が奥深く広く入り込んだ、その太平洋への湾口に、大黒島が栓をしてゐる。雪は北海道の全土を蔽うて地面から、雲までの厚さで横に降りまくつた。

汽船万寿丸は、その腹の中へ三千噸の石炭を詰め込んで、風雪の中を横浜へと進んだ。船は今大黒島をかはらうとしてゐる。その島の彼方には大きな浪が打つてゐる。万寿丸はデッキまで沈んだその船体を、太平洋の怒濤の中へこはごは覗けて見た。そして思ひ切つて、乗り出したのであつた。彼女がその臨月の体で走れる限りの速力が、ブリッジからエンヂンへ命じられた。

冬期に於ける北海航路の天候は、いつでも非常に險惡であつた。安全な航海、愉快な航海は冬期に於ては北部海岸では不可能なことであつた。

万寿丸甲板部の水夫達は、デッキに打ち上げる、ダイナマイトのやうな威力を持つた波浪の飛沫と戦つて、甲板を洗つてゐた。ホースの尖端からは、沸騰点に近い熱湯が

迸り出たが、それがデッキを五尺流れるうちには凍るのであつた。五人の水夫は熱湯の凍らぬ中に、その渾身の精力を集めて、石炭塊を掃きやつた。

万寿丸は右手に北海道の山や、高原を眺めて走つた。雪は船と陸とをヴェールを以て遮つた。悲壮な北海道の吹雪は、マストに悲痛な叫びを上げさせた。

生命のあらゆる危険の前に裸体となつて、地下数千尺で掘られた石炭は、数万の炭坑労働者を踏み台にして地上に上つて来た。そして、今、海上では同じく生命の赤裸々な危険に、その全身を船体と共に曝露しつゝある、船員の労働に依つて運送されるのであつた。

藤原六雄は、ランプ部屋へ入つて、ランプの掃除をしてゐた。彼は、今年二十八歳のひどくだまりやの、氣むづかしやであつた。そして、一体彼は何か仕事をしてゐるのか、どうか疑はしいほど、労働が嫌ひな性のやうに見えた。彼の職務は倉庫番であつた。

ランプ部屋はブリッジに向ひ合つて、水夫室と火夫室の間に、はじめに、小さく拵へられてあつた。藤原はそこでランプのホヤを拭きながら、水夫達が、デッキを掃除してゐるのを見てゐた。彼は此頃ボースンにも、一等運転士にも見込みが悪いことを知つてゐた。「ストキ（倉庫番）」にもワシデッキの時には手伝つて貰はなきやならん。一万噸も八千噸もある船とは異ふんだからな」と、いつか水夫達全部が揃つて飯を食つてゐる時にボースンに云はれたことが

あつた。

「ふん、ストキとは倉庫番でことだ。倉庫番は倉庫の番さへしてりや、それで沢山だらう」と、彼は答へた。

——それ以来、どうも、俺は水夫たちの仲間からまでも受けがよくない——と、淋しさうに、ストキは考へた。

二

船のエンジンフルスピードをかけてゐたが、風と浪とで速力が全で出なかつた。未明に出帆したのに、夕方になつても未だ津軽海峡沖を抜け切らなかつた。

その夜、高等船員側では室蘭へ引きかへさうかとの相談も行はれたが、それは実行されるには至らなかつた。

水夫達は、暴風雪がだん／＼猛烈になつて来るに連れて、その作業も平常とは趣を異にし初めた。船体は保険マーク以上に沈んでゐるので、充分に抵抗的であつて、波浪は一つも残らずデッキへと打ち上げた。そしてデッキは一面の海になつてしまつた。掬ひ込む水は仲々小さな排水口からは急には出て行かなかつた。デッキには、ハッチの上を通るやうに、ライフライン（命綱）が張られた。いつデッキを通らうと試みても、そこは外海と何等異なる処はないからであつた。

浪はその山と山との間に船を挟んでしまふ。その谷になつた部分が船のヘッドから胴体へ進む時、次の山の部分がヘッドに打ち衝る。鉄製のわが万寿丸も、この苦悶には堪

へかねて、断末魔の叫びを挙げる。ミリミリ、ドタンとうなる。その谷がやがて、ともへ行くと推進器は空中で空から回りをする。推進器は、飛行機のプロペラのやうに空中で廻転する。兇暴なその船の太さほどの猛獣のやうに吠える。特別装置のないどの棚からも、いろんなものが落ちる。ランプのカップからランプが踊り出る、舵器は非常にその効力を減じられる。速力は今ではもう推進器の空転の危険から、殆んど三哩位に減じられて、たゞ船首を風の方向から転換しないやうにのみ総ての努力を尽してゐた。

機関室の方も汽罐室の方も、非常な困難があつた。油差しは、動揺のために、機械と機械との狭い部分に入り込むのに、神秘的な注意を払つた。火夫はその汽罐の前で、シヨベルを持つて、よろけまいとして骨を折つた。

汽罐室の真上のコック場では、コックが、いつも一度で炊く飯を五度位に分けて炊かねばならなかつたし、お菜も同様な方法にして猶、汁物は作るわけに行かなかつた。

コロッパス（石炭運び）は、石炭庫の中で、頭中を痛だらけにするのを、どうしても免れるわけには行かなかつた。

水夫等は、デッキを洗ふ波浪からダンブル内への浸水を護るために、ハッチカバー（船艙の蔽ひ）や、それを押へた金具や、又その上から嚴重にロープを通して縛らねばならなかつた。それは危険な作業であつた。そして此危険な作業なしには、此の船全体が危険から免れ得る方法がなかつた。恰も意地の悪い馬が馴れぬ乗手にするやうに、船体

は猛烈にその背を振つた。そしてその毎に柄杓が水を掬ふやうに、デッキは波浪を掬ひ込んだ。ロープは濡れて、固くなつて操作に非常な困難と遲滞とを招いた。然し夫は成し遂げなければならぬ仕事であつた。ハッチが水を飲むと云ふことは、文句なしに、簡單明瞭に船体の沈没を意味するものであつた。五人の水夫と、ボースンと、ストキと、大工との八人が総動員で、此仕事を遂げた。

彼等はその体が、そのまゝ凍るやうな風の下に、メスのやうに光る、そして痛い波浪に刺された。そしてそれは、余り動かない部分をカンカンに凍らせた。

船体の危険と、船体と共にする自分自身の危険と、そして、観面に自分の凍えんとする肉体に対する危険とは、火事が中風の婆さんに、石臼を屋外まで抱へ出させたほどの目覚しい、超人間的な活動を、水夫達に与へた。そして、船首のハッチ二つは完全にその防備が出来上つた。

未だ二つのハッチが船尾の方に残つてゐた。そして、時間は今夕食に迫つてゐた。水夫たちは、飢ゑを感じた。けれども、海も飢を感じて、わが万寿丸を吞まうとしてゐるのであつた。

船は絶えず藻掻き、マストは絶えず悲鳴を上げ、リギンは絶えず恐怖に叫んだ。船首の船底は、波浪と決闘するやうに打ち合つた。船尾ではプロペラーが、その手を空に振り上げた。

自然と人力とはその最大の力と、あらゆる智慧とを以て

戦闘した。

三

船を一廊として、人間と機械とが完全に協力して、自然と戦つてゐる時に、船員たちは、自分たちが、船のりであることを、此時以上に癪に障り、心細くなり、哀れに氣の滅入ることはなかつた。そして彼等は、あらゆる瞬間の極度の緊張と、注意とにも拘らず、自分の運命を哀れむのであつた。彼等は、真つ暗な闇の中を電光が一時に、全く鮮明にバツと明るく照らす様に、此困難な労働の間に、感ずる処の彼等の地位は、全くハツキリした賃銀労働者の正体であつた。然し、それは電光と全く同じであつた。彼等は、すぐ、その仕事の方へと一切の注意を向けねばならなかつた。

水夫等は、船首の方を済まして、船尾のハッチへ行くために、サロンデッキに上つた時であつた。ブリッジにゐたコーターマスタの小倉が、何か分らぬことを、体中で怒鳴りながら、物凄しい勢ひでブリッジから飛び下りて来て、サロンデッキを艦の方へかけて行つて、そのタラップをまた飛び下りた。

セイラーたちは、ビクリとした。のみならず、コック場のコックやボーイや交替で休んでゐた機関長や、ブリッジの上の船長やは、全部が小倉の飛んでつた行衛を見守つた。小倉は、船尾へ駆けつけた。そこには、ブリッジから操

るステイムギア（蒸汽舵機）の鎖と、そのカパーとの間に、わざとのやうに、水夫見習が、右半身をうつ伏しに潜り込ませてゐたのであつた。

小倉は、水夫見習が案に出るやうにと思つたのであつたが、然し舵器は同位に船首を保つために、一刻も放擲しては置けなかつた。

そこへ水夫等は全部かけつけた。あるものは、カパーの金板をバーで動かさうと試みた。此間にも波浪は、船首甲板ほどではないにしても三四度、此処を洗つた。

水夫全体の力と小倉との力は水夫見習を、鎖とカパーの間から引つ張り出すことができた。けれども見習は、引きずり上げられた溺死体のやうにだらりとして、眼ばかりを宙につつてゐた。彼は直ちに、水夫二人に担がれて、最も震動と、轟音との甚しい船首の、彼の南京虫だらけの渠へ連れ込まれた。

仕事着を彼から脱がせることは最大の急務であつた。が同時に最大の困難でもあつた。まるで帆布作りの仕事着でもあるやうに、それは凍りついてゐたのである。ついて来た藤原は、その腰のメスを抜いて見習の仕事着を上手に切り裂いた。そして、彼の寝間着が、上にかけられた。

ボーイ長の右手と右の肺の部分に紫暗色の打撲傷が出来てゐた。そして左足の拇指が砕けてゐた。

ストープがないために、水夫等は甚しく寒かつた。見習は、傷と、凍のために、若し此のまゝにして置けなれば、

必ず、始末は早くつくつと云ふことを皆知つてゐた。そこでついて来たストキと、水夫二人は各水夫の渠から、ありつたけの毛布を集めて、それをかけてやつた。

そして、そのまゝ、全部彼等は船尾ハッチのカパー作業に駆けて行つた。

船尾のハッチは船首のそれと同様の危険と困難さをもつて、作業された。手の屈きさうな低空を、雪雲が横飛びに飛んだ。中に、濃い雪雲は、マストに引つかゝつてそれを抜いてでも行くかのやうに、はげしくマストを揺ぶつた。水平線は、頭上遙に昇るかと思ふと、足下深く沈んだ。（船の動揺は、同時に水平線を動かすものだ。）ボーイ長（水夫見習を云ふ）の運命は、全甲板労働者の現在のすぐ背後に鱈のやうに迫つてゐるのであつた。

船尾部分のハッチは此上もなく嚴密に密閉された。そして、次ののは、機関室と、その上部に在る士官室、サロンドッキとの蔭になつてゐたために、以前の三つに比較べて、作業は楽であつた。そこで、藤原は、ランプを燈す準備をするために、再び「おもて」（船首部分）へ歸つて行つた。

ランプ部屋へ入る前に、彼は先づ水夫室へ入つた。未だ十七歳の少年、水夫見習は、痛さに堪へかねて、「お母様、おとうさん」と、両親を叫び求めては、泣いてゐた。そして、暫く息を詰めて、死のやうな沈黙の中へ落ちて行くのだつた。藤原は、ボーイ長の寢床の端板に凭れかゝつて、ボーイ長の顔を覗き込んだ。けれども、見えなかつた。一

つの窓も開けられてゐない水夫室は、出入口から星の夜のやうな光が辛うじて這ひ込み得たゞけであつた。殊にボーイ長のは二層床の下部に当り、光の方を背にしてゐたので、最も暗かつた。藤原は、自分の床から蠟燭をとつて、ボーイ長の枕下に立てた。彼は白ペンキのやうに青ざめて、そしてくらげのやうに衰へてゐた。

末だ、チーフメートは、何等の手当もしには来なかつた。彼は、ボーイ長を慰めた。そして直ぐにチーフメートが「宵業」を持つて、のろ／＼来やがるだらう、奴等には、労働者よりも、ブロックの方が比較にならぬほど重大なんだ、然し、心配しないがいい、皆がついてゐるからと云つて、ランプ部屋へ支度に行つた。

万寿丸は尻屋岬燈台沖にかゝつた。暴化は其勢を少しも収めなかつた。

水夫等はボートやサンバンを吹き飛ばされないやうに、それを、より一層殆んど、吹き出し度い位に、頑丈に、これでは沈没した時に決して間に合はないと、証拠立てられるほど、それほど頑丈に、くど／＼とデッキや煙突にまで、綱を引っ張つた。そして、此の仕事は、波浪の恐れは全然なかつたが、動揺と、風と、おまけに「てすり」がないので、海へ落ちると云ふ危険を伴つた。ボートデッキは、船中で一番高い部分であつて、それは士官室の屋根と天井とを兼ねてゐた。

水夫達は、一本のロープを持つて、ボートの下へ仰向け

に潜り込んだり、ボートの外側——そこはデッキ板一枚の幅しかなくて、海面まで一直線にサイドなのだ——に、今縛りつける、そのボートに摺つて綱をからげるために、サイドへ足を踏ん張つて、海の方へ体を傾けたりした。

ボースンは、直ぐ前のブリッジから、船長が作業を見てゐたために、その禿げた頭を、章魚のやうに赤くして慌てたり、怒鳴つたり、焦つたりした。

四

陰鬱な薄暗がりだが、海上に這ひ出たために、右舷に尻屋岬の燈台が感傷的に瞬き初めた。荒れに荒れる海上に、燈台の光を眺むるほど、人の心を感傷的にするものはない。此海の上は、今にも我々の命を奪はうとする程暴れ、喚いてゐる。そして、我々の家は宙天から地底へまで揺れ転ぶ。そこには火もなく、灯さへもない。だのに、あそこには燈台が光る。その燈台は、確りと地上に立つてゐて、そこには家族がある。団欒がある。愛すべき子供がある。いとしい妻がある。そこには火鉢があるだらう。鉄瓶がかゝつてゐるだらう。正月の用意の餅が掲げてあるだらう。子供がそれをねだつてゐるであらう。「もうねんねするんです。ね、夜食べると、ボン／＼いた／＼ですよ。サ、ねんね」と、母は今年三つになつた子供を膝の上に抱き上げるだらう。さうして、可愛くて堪らぬと云つた風に、子供の頬にキスするだらう。さうして、夫と顔を見合せて微笑むだらう。

そして、「明日は又随分沢山鳥が落ちてくることでせうね。こんなにしけるんだもの。鳥だつて船だつて敵ひませんわね」と、云つて、火鉢から鉄瓶を卸して、茶でも入れるだらう。そして、子供に隠して、その父から一枚の煎餅を出して貰つて「坊やはいいい子ね、サ、お菓子」と云つて出し抜けに子供にそれを与えるだらう。

だのに、俺達は、凍えるやうな風と、メスのやうな浪と、雪のやうに冷たい資本家や、氷のやうに冷酷な船長の下で、労働をしてゐるんだ。俺は何だつて船員になんぞなつたんだらう。

殊に家持ちの下級船員はさうであつた。彼等は、さうでなくてさへも、その家庭に堪らなく曳きつけられてゐるのに、暴化のときには、その心持は長い刑を言ひ渡された囚人が、その家族のことを身も心も瘠せ砕けるやうに恋ひ慕ひ、氣遣ふのと異なる処がなかつた。全く、今では、両舷から、鯨油を流してさへゐる位であつたから。鯨油を流すことは、暴化も甚しくならないとやらないことであつた。尻屋の燈台はセンチメンタルに瞬く。日は暮れかけて、闇は、波と波との谷間から煙のやうに忍び出しては白い波浪の飛沫に、蹴飛ばされてゐた。

舵手の小倉は、船首を風位から変へないやうに、そのあらゆる努力を傾注してゐた。彼の眼はコムパスと、船の行方とを、機械的に注視してゐた。

と、本船の前左舷遙かな沖合に、一艘の汽船が見えた。

「あ、汽船が！」と、小倉は無意識に叫んだ。

船長もチーフメイトも誰もがブリッヂの左舷へ集つて、望遠鏡のレンズを向けた。

此少し前から、ボートデッキで、サンパンの下にもぐり込んで仕事してゐた、水夫の波田芳夫と云ふのも、今小倉が見付けたのを見付けて、一人でサンパンの下から眺めてゐたのであつた。

ブリッヂでは望遠鏡があるために、其汽船は救助信号を掲げて、難破漂流しつゝあるものであることが分つた。

ブリッヂからは、直ちにエンヂンへ向けて、フルスピードを命令した。一つ救助に出かけようと云ふのであつた。

全乗組員は難破船が見えると、その救助に向ふことを直ちに知つてしまつた。そして、全員はボートデッキヘスタンバイした。

わが勇敢な、然も自分も腹半分水を飲んだ半溺死人のやうな、万寿丸は、その臨月の体で、目的の難破船に、僅かに船首を向けた。極めて、それは僅かの程度であつた。が、本船はグーツと傾いた。そして見る見る中に、その舵が向いても居ないに拘らず、グン／＼その頭を振り初めた。そして、同時に物凄い怒濤が、船首、船尾の全部を吞まうとするやうに打ち上げて来た。

船長は、今云つた許りであつたにも拘らず、方位を元へ返した。本船は極めて短い五分とかゝらぬ間に、殆んどコースを半回転しようとしたのであつた。

難破船の稍近くへ近づくと、能きたが、本船はその船首を非常な努力の下に従前通りの位置に返してしまつた。

難破船を救ふと云ふことは、本船と一緒に沈める計画になると云ふので、船首はもうその向きを換へなかつた。けれども、哀れな兄弟たちの乗り込んでゐる妹の難破船は、段々我々の視野に大きく明瞭に入る様になつた。我々は、今のコースを以て進むならば、四哩位の側を通過するであらう。

波田は、サンパンの下から這ひ出して猶も一生懸命に、煙突にもたれて、寒さと、掴み処を同時に得ながら見入つてゐた。狂犬の口を蔽ふ泡のやうな怖ろしい波浪と、此夕暗とに、あの船は吞まれてしまふんだ。彼は自分が二度も沈没に際会した時の事を思ひ浮べては、その難破船に射込むやうな眼を投げてゐた。

その小さな五百噸位の小蒸汽船は、北海道沿岸廻りの船らしかつた。今やその煙筒からは燃え残りの煙草程の煙も出てゐなかつた。汽罐に浸水したのはもうずつと早いことだつたらう。そのマストの下の方には、棧橋に流れかゝつたぼろ布のやうに帆布が、まとひついてゐた。汽罐に浸水してから、どこかのカバーでも外してマストに縛りつけたものであらう。僅かにデッキの上でバタ／＼と、その切れ端が洗濯したおしめのやうに振れてゐた。

それにしても船員は、ブリッヅにも、マストにも、デッキにも、どこにも見えなかつた。津軽海峡を越す時に命を

捨て、ボートでも本船を捨てたのであつたのかも知れない。又は、その各々の室に凍えた体を、動揺のまゝに、お互に打つ衝け合つたり、追つかけ合つたりして、樂しみのなかつた生前の労働者の運命を呪ひ悲しんでゐるのかも知れない。然し、この暴化はそれほど長く続いた訳でもなかつた。本船出帆の前日が其最高潮であつたのだから未だ二昼夜しか経つてゐない。船員は、或は、一室に集つて、別れのための最後の貧しい食事でもしてゐるのかも知れない。

「あゝ、俺は二度まで沈没船に乗つてゐた。一度は胴つ腹を乗り切られ、一度は衝突だつた。が、どちらも瀬戸内海で、一度は春の末、一度は真夏であつた。そして、そのどちらの時も救はれた。けれども、北海道の冬の海では逆も助けつこはあるまい。俺は、瀬戸内海で沈められた時に、海の中に飛び込みざま『助けてくれ』と怒鳴つた悲鳴を今でも思ひ出せる。その叫びを挙げる刹那は全く、ありとあらゆる記憶、あらゆる感じ、それ等のものが、一度に総勘定でもするやうに頭に浮んで来た。そして、『十八では未だ死ぬのに、二年早すぎる』と、俺は思つた。何で二年早すぎたのか自分でも分らない。けれどもハツキリ自分は二年早すぎると思つた。おゝ！もし、あの船の人たちが、死んだとすれば、皆俺と同じ感じを、抱いて死んだことだらう。死ぬのには、人間は何歳になつても二年早すぎるのだと、自分は此頃考へるやうになつたが、全く、どの位多

くの人が二年宛早く死んで行くことだらう。それにしても、此船長は何と云ふ冷酷、残忍な奴だらう。僅か四哩や五哩より離れてゐないのに、その最後を見届けようとしなないとは。自分の悦樂のためには此船長は俺達の生命を、いつでも饑の前に投げてやるだらうに。俺は、その沈没船に代つてでも、又この船員たちのためにも、船長と闘ふ時が必ず来ると信ずる」と、波田は考へに耽つた。

難破船は益々近づいた。日は暮れたけれども、未だ夕明りである。船は、今ならば、もつと難破船へ近附くことが能きのであつた。が、わが、勇敢な万寿丸は船員全体の希望にも拘らず、船長の一言によつて、冷やかに姉妹の死を見捨て、去ることになつた。そして、本船には、救助不能の信号が揚げられた。相手へ知らすためのでなく、乗組船員を胡魔化し、同時に海事日誌を胡魔化するための。

實際、此時暴化は段々風いで来たのであつた。船員は一時間前の勇敢なる船長の行動を不審に思ふのであつた。

その可愛い小柄な船は四十五度以上五十度近く傾いて、今にもそのまゝ、沈み行きさうに見えた。そして人はどこにも見えなかつた。甲板の上は見事に掃除されて、その掃除手の怒濤は、僅かに甲板の隅に凍りついて残つてゐるのみであつた。マストのキャンバス(帆布)は、ハッチの上部カバーであつた。それは全く淋しい姿であつた。火のない船であつた。人の居ない船であつた。生命のない捨てられた世界であつた。われ／＼は皆サロングデッキに並んで、浪

と運命を共にするであらう、その船に別れを告げた。誰の心にも黒い、寒い寂寥が虫食つた。

これは、やがて、わが万寿丸の運命でもあつた。われ等が、船底に飢ゑと寒さとに倒れて漂流する時に、もし大きな船が又、われ等の傍を通るであらう。われ等は信号を掲げねばならぬことを知つてゐるだらう。又われ等は、人間がその船室に凍えかけてゐることを、知らせる必要のあることを知つてゐるであらう。それにも拘らず、誰も甲板に出ないであらう。出られないのだ。途中で仆れてしまふのだ。

そして、漸く、最後の一人がデッキへ這ひ出た時には、今汽笛を鳴らして通つた船は、浮べる一大不夜城の壯觀を見せて、三哩も行き過ぎてゐるであらう。

このやうにして、わが万寿丸は汽笛を鳴らして通過した。その汽笛を微に聞いて、今立ち上らうとして、その凍えた体に最後の努力と藻掻きとを試みてゐる兄弟が、その船の中に居ないだらうか、その頼りない捨てられた犬の子のやうに哀れな形をした船の中に。

鐘が鳴つた。夕食である。水夫は水夫室に、火夫は火夫室に、各々入つて行つた。

難破船は、薄闇の中に、暴れ狂ふ怒濤の中に、伝奇小説の中で語られた悲しき運命の船の如くに、とり残された。

藤原は、船尾にランプを吊り上げながら、残された船を見送つて、堪へられない寂しさと、憤とに心を燃した。

「あの船には、少くとも二十人の乗組員はあつただらう。それが養つてゐる、同じ数位の家族もあつただらう。あの中で二十人は凍死したか、ボートで溺死したか、どちらにしても彼の乗組員が助かると云ふことは考へられないことだ。二十人は遂々、その家族を残して、妻子はその主人に残されて逝つてしまはれたんだ。そして、その船に依つて、最も重大な利害を感じる筈の船主は、今その宅で雪見酒を飲んでゐるのであらう。その二十人の不払労働から蓄めて経営してゐる会社の株のことを、電報が入ると直ぐに氣にするだらう。遺族には、香典が二十円宛位は行くであらう。そして、船主は、二十人の人間のことも、その沈没するのが当然なほど腐朽し切つた、ぼろ船の運命に對して、高利貸式の執拗さで口惜しがつてゐるだらう」

「人間が生きて行くためには、どうしても人間の生命を失はねば生きて行けないのか、人柱！ 俺達は皆人柱なんだ！」

五

水夫室では、水夫達が、犬ころが唸り合ひながら食べると同じやうに、騒ぎながら、夕飯を食つてゐた。

負傷したボーイ長の側には、藤原と、波田とが居た。波田のベッドは、ボーイ長のとL字形に隣合つてゐるので、自分のベッドで、頭をかどめながら、うまい夕食を摂つた。全く、字義通りに「喉から手が出る」程であつた。胃の腑

へ届く食物は、そのまゝ直ちに消化されて、血管を少女のやうな元氣さと華かさとで駆け廻るやうに感じられた。彼は飯を口一杯に頬張りながら、ボーイ長の足許に波田と並んで、これを煩張つてゐる藤原に話しかけた。

「チーフメートは来たかい」

「未だだよ」藤原は、全でそれが波田のせるでありでもするかの様に、膨れつ面をもつて、答へた。

「随分無責任ぢやないかい。三時間も打つ捨らかしとくなんて」

「距離が遠いんだよ。距離が、奴等のはね」藤原は謎の様に云つた。

「ハ、ハ、ハ、なるほどね、サロンから、おもてまでぢや三時間ぢや来られねえや」波田は、冗談だと思つて笑つた。

「五感と、神経中枢との距離がさ。鼻と口との距離と同じ程なんだよ」

ストキはひどく憤慨してゐるやうに見えた。「それに、かう云ふことに馴れて、無神経になるつてことは、それが仲間のことであると、なほさら善くないね」

藤原は、話がむづかしいので、有名であつた。彼は漢語見たいなもの——仲間の間でさう云つた——を使ひたがる癖が骨に沁み込んでゐるのであつた。

未だ食事が、始められて間もなく、チーフメートは、ボーイに「救急箱」を持たせて、「大急ぎ」で駆け込んで来た。

水夫達は食事を中止した。そして、水夫見習のベッドを、チーフメートと一緒にとり巻いた。

「ボースン！こんなに暗くちや何も分らんぢやないか、蠟燭をつけて来い。五六本！」と、チーフメートは一発放した。

かくて、蠟燭はつけられた。ボーイ長がそこへ寝始めてから、三時間目に初めて、彼の室は燈で照らされた。彼が船へ持つて来たものは、その体と、その切り捨てられた仕事着と、初期の禿頭病とだけであつた。

彼は、陸上でひどく苦しんだ。彼の家はひどく貧乏の上に、兄弟が十一人もあつた。彼は、小さい時分から、自分を養ふのは自分でなければならぬことを感じさゝれて来たのであつた。

彼は、訴へるやうな目附きで、又、彼のそのやうな負傷にも拘らず、チーフメートに直接物を言ふことを恐れて、遠慮勝ちに「痛あーい」と呻いた。

チーフメートは何でも構はず、ボーイ長の左半身全体に、イヒチオールを塗りまくつた。彼は一分間でも早く彼の義務が終ればいいのであつた。医者 of のやる様なことが、彼の義務であることも癪に障ることであつたが、それは、彼がそれでパンを得てゐる以上、仕方のない災難なのであつた。彼は、彼もパンのために、そのいやな仕事を持つてゐることを知ると同時に、もつと悪い条件の下にパンを求めてゐるものがあり、それが「おもてのならずもの」どもである

ことを知らねばならない筈であつた。ところが、彼は、ブルジョアが、彼と自分とを区別してるとすつかり同じやうに、彼とセーラー等とを区別してゐた。「俺は紳士だが、奴等は労働者だ」或はもつと正確には「俺は人間だが、奴等はセーラーだ」と。

チーフメートは、限りなき嫌惡の情を含みながら、ボーイ長を滅茶苦茶に、イヒチオールで塗りまくることを、(面倒臭い余りに、さうするのではない)と云ふ風にセーラーたちに見せたかつた。彼は為なければならぬことの形式だけをやつて、然も感謝の念をセーラー達から盗まうとさへ企んだのであつた。

黒川鉄男、これがチーフメートであつた。黒川は、イヒチオールを塗りまくる間に、口をきくことは、それほど仕事 of の能率を妨げないし、又、それ以上仕事を、汚くも困難にもしないと考へた。そして、彼がどんなに、此の「虫けら」のやうなボーイ長に対してさへ、人道的であるかを見せてやることはいい。と彼は考へた。

「おもては全く、寒いね、そしてまるで真暗ぢやないか」と黒川は口を切つた。彼はボーイ長の胸部にイヒチオールを塗布しながら云つた。

「満船の時はどうも仕方がありません」と、ボースンは鞠躬如として答へた。全で、全で、寒くて、暗くて、汚くて、狭いのは、ボースン自身の罪でもあるやうに。

「これぢやいくらお前等でも堪らないなあ」